

水痘、おたふくかぜ、B型肝炎も



ワクチン接種で予防しよう！

臼杵市では全国に先駆けてH26年4月より水痘、おたふくかぜ、B型肝炎の公費によるワクチン接種を行ってきました。開始より3年たちましたが、あらためてこれらのワクチンの必要性についてお話しいたします。

水痘

水痘は約2週間程度の潜伏期間ののち、体、頭、陰部などに水疱、丘疹、紅斑などが出現し、次第に痂皮になって1週間程度で治癒します。多くは重症にならない病気ですが、ときに脳炎や脳症を合併することがあります。水痘は空気感染のため、強い感染力をもっています。

水痘ワクチンを接種することで、症状が軽症化し、重篤な合併症を起しにくくなります。全国ではH26年10月より1歳～3歳の誕生日までの児で定期予防接種となりました。現在は標準的には1歳代で2回接種します。

定期接種開始後から当院での水痘患者の発症年齢はかなり変わっています(図)。これまで多かった1、2歳代が減少し、代わりにそれより年長や小学校低学年での発症が増えています。また以前、任意接種で水痘ワクチンを1回だけ接種した児の患者数が増えています。1回のみ接種では抗体の上昇が十分でないため、2回接種することは重要です。

おたふくかぜ

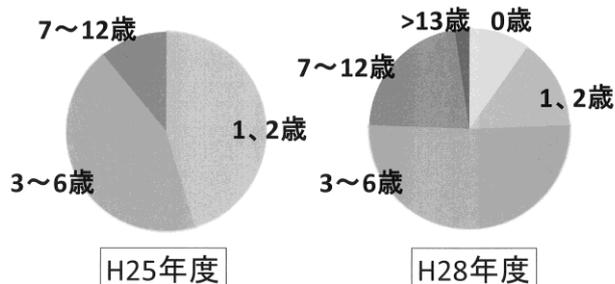
おたふくかぜはムンプスウィルスが咳、くしゃみや接触してうつる病気で、熱と耳下腺の腫れが特徴です。4～5年おきに流行を繰り返しています。合併症として無菌性髄膜炎、精巣炎・卵巣炎、肺炎などがあります。近年重要な合併症と認識されているのはおたふくかぜによる難聴です。以前は15000～20000人に1人といわれていましたが、1000人に1人くらいの割合で起こるのではないかとされています。多くは片耳ですがまれに両耳に起こり、発症すればこの難聴には治療法がありません。おたふくかぜのワクチンはこれらの合併症の予防につながります。水痘同様1回接種では抗体の上昇が十分でない場合があり、2回接種は重要です。

B型肝炎

乳児がB型肝炎にかかるとキャリア(持続感染して慢性化)になりやすく、また涙、唾液、汗にもB型肝炎ウィルスが排泄されるため、他の家族や保育園での水平感染がおこることが分かってきました。以前から行われていた母子感染予防では、これらの感染をふせぐことができませんでした。このため乳児期早期にB型肝炎ワクチンを接種するのは重要なことです。

全国では昨年10月より1歳未満の児での定期予防接種となりました。臼杵市は独自に2歳未満にB型肝炎の接種をしていましたが、この措置はH30年3月末で終了します。このため現在1歳～2歳未満で3回接種が済んでいないお子さんは早めにワクチンを接種してください。

<定期ワクチン開始前後の水痘罹患年齢の変化>



※当院来院患者数の割合です